歴史的建物の建築金物について－３　「土蔵の金物」

大平　茂男

土蔵は全体を厚い土で覆い、出入口や窓には重厚な土戸が設けられている防火性能の高い建物で、用途としては、収蔵庫や見世蔵（店蔵）などがあります。外壁を漆喰で塗り籠めた造りを、土蔵造りと一概に呼んでいますが、土壁の厚さが薄いものや、隣家境の壁のみを塗り籠めているなど、実際の造りは多様です。

今回は、この土蔵造りに使われている金物を、これまでの調査からピックアップして取り上げます。これらの金物からは、かつて鍛冶屋が鍛造して造っていた跡が読み取れます。

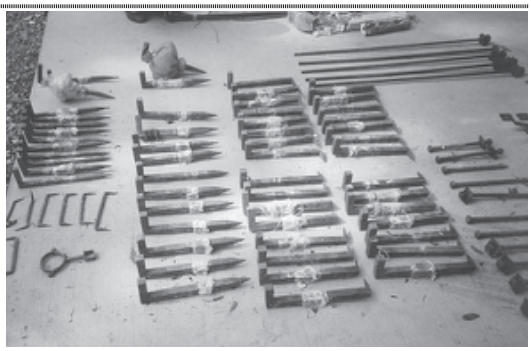
折釘

土蔵の壁面に「つぶ」と呼ばれるお椀を伏せたような漆喰の盛り上がりの中心に出ているＬ形の金物が折釘です。

土蔵は火災時の延焼防止のため、内部の木造架構は壁と屋根に塗られた厚い土で覆われていますが、折釘は柱に打たれて壁の外まで出た唯一の金物です。したがって、この金物の周囲は入念に漆喰と麻で根巻きされ、壁から出るところも漆喰で盛り上げた「つぶ」で固められています。

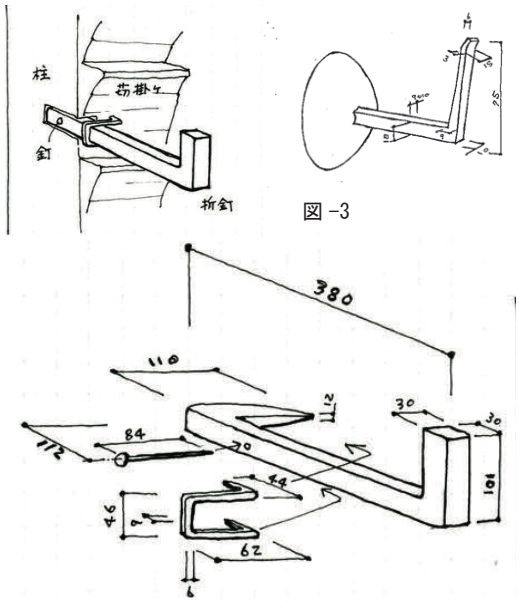
この折釘には、窓や下屋の庇を掛けたり、雨樋の支持金物や置屋根の煽り止め金物、修理の時の足場を支えるなどの役目があります。

折釘を柱に打つ打ち方には、柱の正面に釘のように打ち込む方式と、柱を欠き



図－1　大正９年に建てられた所沢の見世蔵で使われていた折釘は40本で、柱の横に打つ折釘が15本、正面に打つ折釘が25本であった。長さは350～380㎜、太さは17～25㎜角

図－2　右側の５本が柱の正面に打つ折釘で、左の３本が柱の横に打つ折釘



図－3

図－4　これまでの調査の中で最も立派な折釘、柱の横に溝を彫って打ち込み、さらに釘と金物で固定する。右上の金物は文化15年（1818）の墨書のある土蔵のもので、扁平である

込んで横に打ち込む方式があります。また、折釘の寸法は様々で、比較的古い土蔵のものは小振りで、部材も正角ではなく、厚い板状のものが多くみられます。

これまでに調査した中で一番立派な折釘は、明治22年に建てられた所沢の土蔵のもので、30㎜角の材料で造られ、長さは38㎝もありました。この折釘は、柱の横に彫られた溝に押し込むように側面に打たれ、さらに長さ84㎜の小さな釘と、折釘を抱き込むように止める金物でしっかり固定されていました。[図-2･3･4]

樋受金物

土蔵の樋は、鉢巻や蛇腹の下に出ている折釘から、長い腕の金物を伸ばして支えられています。一般的には3尺(909㎜)間隔に立つ柱に折釘が打たれるので、独特の曲線をもつ樋受金物もこの間隔で並び、土蔵の特徴的な姿の一つとなっています。

一方で、この長い金物は雪の重さで外側に倒れてしまうこともあります。また出桁造りを塗り籠めた見世蔵の場合は、軒先を木の下地で造り、その上に土壁を75㎜程塗重ねて漆喰で仕上げているので、長い金物は使わず、この下地に直接短い樋受金物を打込んでいます。[図-5]

置屋根の煽り止め金物

土蔵の屋根には、置屋根と呼ばれる土蔵から浮いたように見えるものと、土蔵と一体となった瓦葺きがあります。土蔵は、元々置屋根が多かったと考えられ、葺き材も茅葺きや板葺き、鉄板葺きなど

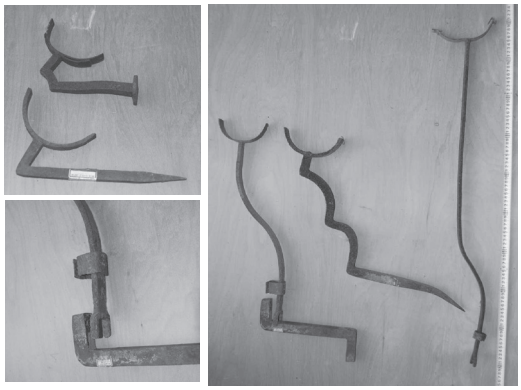


図-5 樋受金物は左下の写真のように折釘に馬乗りに載せて、筒状の輪を被せ、ガタつかないように鉄の楔を打ち一体とする。左上の短い金物は、下地に直接打ち込む

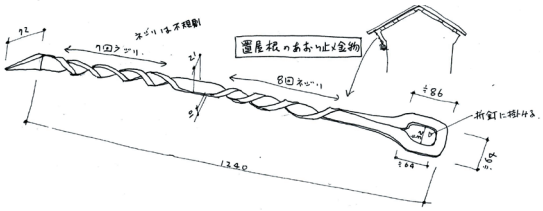


図-6 長さは約1240㎜、10 × 21㎜の帯板をひねっている

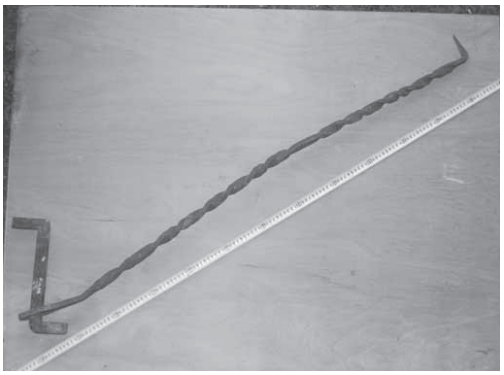


図-7 この煽り止め金物は明治8年のもので、一端は垂木の先端に打ち込み、一方は折釘に掛ける

図-8 折釘に掛ける部分

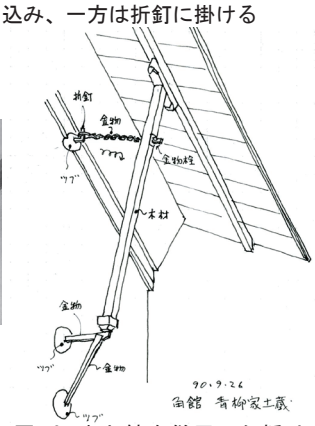


図-9 木と鉄を併用した煽り止め（秋田県角館市）

多様です。置屋根は、土居塗と呼ばれる土蔵の屋根面に塗られた土の上に、猫石（飼木とも呼ばれ、木材、石、土が使われる）を介して鞘組（木材をハの字形に組む）し、母屋、垂木を配しています。このように置屋根は、土蔵の上に置かれているだけで、しっかりと固定されていないので、台風時には屋根が飛ばされたり、動いてしまうことがあります。

煽り止め金物は、4隅の軒先の垂木に一端を打ち込み、一方を折釘に掛けて屋根を固定する役目をしています。[図-6･7･8]

秋田県の角館では、置屋根ですが多雪地帯なので、軒先の荷重を支えるように木材と金物を組み合せています。[図-9]

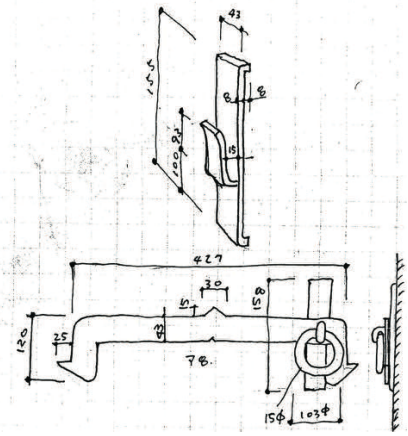


図-10 明治20年に建設された土蔵の打掛金物、観音開きの土戸の戸締まり金物

図-12 木柄の枠に差し込まれた肘壺

肘金物

土戸に使われる丁番で、軸の付いた肘金とそれに被せる肘壺、その間に挟む蛇目（真鍮が多いが、ない場合もある）と呼ばれるワッシャーから成っています。肘金は、本体の柱から貫で持ち出された実柱に45°で差し込まれ、肘壺は土戸の下地となる木柄の幅一杯に差されて、先端には金属の割ピンが打たれます。

鍛冶屋によって造られた古い肘壺は、帯鉄を軸の形状に曲げて二重に重ねて鍛造されており、元の方は先端より厚くなっています。[図-11･12･13]

図-11 左の柱が実柱で、土戸の土は落ちて下地の木柄が見えており、肘壺が木柄の端まで入っている

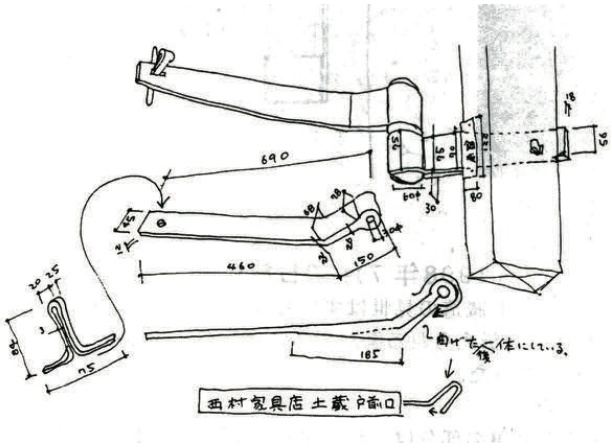


図-13 金物は鍛造して造られ、元と先端では厚さが違う

丸環

土蔵の瓦屋根は、7寸勾配程度の急勾配多いので、修理等の際は棟に設けられた丸環を、足場やロープの支持金物として使います。

丸環は径150～180㎜程で、棟の両側にそれぞれ一対設けられるので、丸環の支持金物はTの字形をしており、足の部分を屋根の下の棟木に打込み、土居塗（屋根面の土塗部）面では入念に根巻きされて固定されます。[図-14]

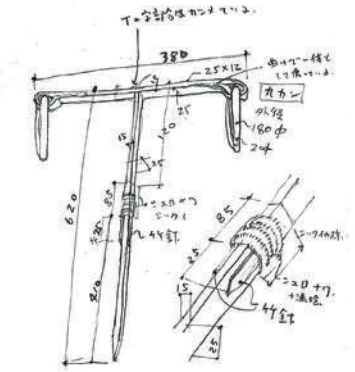


図-14 明治20年に建てられた所沢の見世蔵の丸環

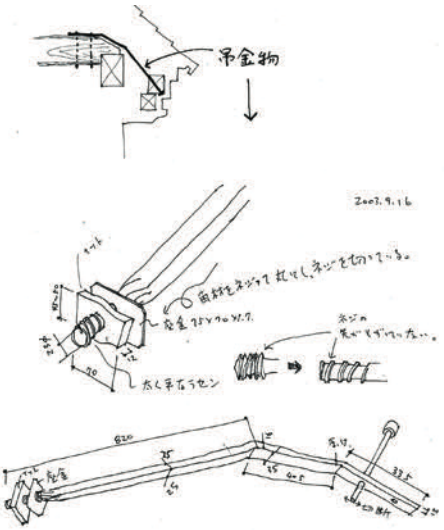


図-15 補強金物　小屋梁から出桁を吊っていた

補強金物

この金物が使われていた所沢の見世蔵は、明治20年に建設されたと推定されます。金物は、出桁を小屋梁から吊っていたものです。形状は、35×13㎜ほどの帯鉄を加工して途中で25×25ミリの棒状にし、さらに先端を丸棒にして、ピッチの大きなタップを切り、ナットは長方形の帯鉄を切ったものを使っていました。[図-15･16]

小舞竹の中の鉄棒

これも一般的ではないのですが、珍しいので取り上げました。最初は所沢の土蔵の解体現場ですが、その後も同市の明治21年に建てられた土蔵と、上山口の農家の土蔵の解体現場からも見つかりました。

小舞竹の中に、鉄棒が挿入されていたのですが、いずれも解体後の状態なので、鉄棒入りの竹小舞がどの場所にあったのか等はわかりません。鉄筋はいずれも角材ですが、太さは違います。

以上が今まで調査した金物類です。

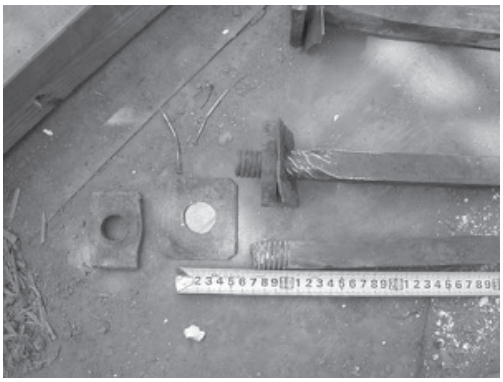


図-16 補強金物のナット部分は、手間をかけて造られていることがわかる